川上 高司 ブログ アーカイヴ

2015年

5月5日

すべては2003年から始まった

2014 年 1 月のある朝、シリア北部の小さな街で、一人のイラク人が殺害された。彼のことを知る者はおらず、後になってようやく通称「ハジ・バクル」と名乗る者だと判明した。

だが、誰も知らないということが彼のアイデンティティを物語る。ハジ・バルク、本名はサミル・アブド・ムハマンド・アル・カリファイといい、サダムフセイン時代の空軍の情報将校だった。バルクこそが、イスラム国（IS)を考案しコントロールしていた陰の支配者だった。バルクは IS の青写真を３１ページに及ぶレポートに書き、カリフ国の建設のプランを立てて実行していったのである。そのレポートをドイツのスピーゲル誌が入手し公表した。

スピーゲル誌によればバルクのプランの特徴は、情報機関、つまりスパイを駆使して侵攻する地域の住民の情報を集めて、リクルート、誘拐などを実行し支配を強めた点にある。情報将校らしく情報によって人々を支配しようとしたのだ。そして弁護士や教師など知識層を誘拐、殺害して将来対抗しそうな勢力を排除していった。バルクは、たとえば誰がどんな家具を必要としているかという詳細な情報まで集めようとしていたようである。

なぜイラク人がイラクを侵攻するのか。始まりは、2003 年のアメリカによるイラク戦争だった。イラクに侵攻したアメリカはイラク軍を武装解除した。当時情報将校だったバルクは失業し地下に潜伏するようになった。新しいイラク政府はシーア派で、スンニ派は冷遇されるようになった。とりわけフセイン時代のバース党員だった者には厳しい時代となった。やがて反米の下、旧バース党、元軍人、スンニ派過激派グループとシリア政府が結束するようになった。ここに、バルクとシリアとの繋がりのルーツがある。後にシリア政府と IS は地下で繋がるのである。シリア自由軍とアル・ヌスラが結束して IS に対抗するようになると、シリア政府は密かにシリア自由軍に対して空爆して IS を支援したという。

ＩＳはアメリカのイラク侵攻にその源があると言える。10 年かけてイラクを追いやられたバルクたちは戻ってきたのだ。イラク人にとって戦争はまだ終わっていないのである。

5月18日

動き出した米露関係

5 月 12 日、ロシアのソチでケリー国務長官とプーチン大統領が会談をもった。ウクライナ情勢をめぐって米露関係が冷え込んで以来、アメリカの閣僚がロシアの地で

プーチン大統領と会うのは初めてだろう。ケリー長官とプーチン大統領は 4 時間たっぷりと話し合ったという。テーマは国際情勢ということだが、ウクライナ問題は当然盛り込まれ、さらいシリアやイランの核協議についても話し合った。

その後、ラブロフ外相とケリー長官も会談し、さらに 4 時間ほど話し込んだという。もともと友好的な 2 人の間柄である。率直な意見交換ができたに違いない。

会談に先立ち 2 人は揃ってロシアの戦没者墓地で献花をして、第 2 次世界大戦 70 年という時間の重みも分かち合った。その後プレゼント交換をした。ラブロフ外相はケリー長官に、地元産のじゃがいもとトマトを送った。昨年、ケリー長官がラブロフ外相にアイダホ産のジャガイモを送ったことへの返礼である。一方ケリー長官はブリーフィングケースを送った。

今回の会談で何かしらの合意が形成されたわけでもなく、ウクライナ問題ではまるで並行線だったいう。それでも会談が行われたという事実そのものが大きな意味を持つ。それは険悪だった米露関係の改善に向けて両国が動き始めたということを意味するからである。

アメリカがロシアとの関係改善に舵を切ったのは、中国がユーラシア大陸で存在感を高めてきたことが大きく影響している。中国は AIIB（アジアインフラ投資銀行）の設立を呼びかけてユーラシア地政学を展開する意図を示した。これに対してイギリスをはじめとするヨーロッパ諸国や日本以外のアジア諸国が参加の意志表示をした。結局主要国のうち、アメリカと日本だけが不参加という状態になっている。このままであればやがてユーラシアからヨーロッパに至るまで中国の影響力が強まることは間違いない。

アメリカにとってロシアは、ユーラシアで中国に対してバランスをとるために是非とも関係を改善しておかねばならない国となったのである。米中露の関係は相互に絡み合って予断を許さないほどに流動的で徹底的に現実的である。

5月24日

カタール国王のメッセージー「Hopeless」がテロの源

5 月 12 日、アメリカニューヨークタイムズ誌に、カタール国王の寄稿文が掲載された。タイトルはまさに「オバマ大統領へ」である。その中で国王はイスラムとテロリズムについて言及している。

イスラム教徒として、イスラム世界の内側からのメッセージは真摯に心に響く。国王は､昨今のテロリズムは世界で言われるようにイスラム教に起因するのではない、テロリズムは「Hopeless（希望がない）」であることに起因すると述べた。シリアやイラク内戦で発生した難民キャンプに蔓延する hopeless こそがテロリズムの源となっている。リビアやイエメンでも内戦が拡大しつつある今、さらなる hopeless がさらなるテロを生む悪循環に陥っているというのだ。

アメリカの対テロ対策の専門家であり元ＣＩＡのブルース・リードルもやはり難民キャンプで生まれる過激思想に警鐘を鳴らしている。リードルによれば、難民キャンプに暮らす若者たちの間に広がる絶望感と強い反欧米感情をアルカイーダの勧誘が吸い寄せているのだという。だからジハードに参戦する若者が後を絶たないのだ。

イスラム国（ＩＳ）はそもそも 2003 年にアメリカがイラクに侵攻した際、国を追われたイラク軍の将校がいつか母国へ戻ろうと機会を伺っていたことに起因する。追

放された絶望感と反米感情がその源なのである。だからＩＳは欧米がひいた国境線を否定して新たなイスラム国家を目指している。

この hopeless からの脱却に、アメリカだけでなくイスラム諸国自らが取り組んでいかなくてはならない。それは、より深くより長い時間をかけてより戦略的なアプローチが必要となる。空爆では解決しないとカタール国王はメッセージを綴る。

国際社会にはそもそもイスラム教への理解が必要である。そしてカタール国王が述べたようにテロリズムとイスラム教を切り離し、イスラム世界の内外からの努力によってテロを根絶していかなければならない。その覚悟が求められている。